

7

ペラグラ 第5報

—James Wood Babcock (1856–1922) の生涯と業績—

伊藤 泰広

トヨタ記念病院 脳神経内科

【背景・目的】 演者は、ペラグラの歴史と現代における課題を過去4回にわたり検証し、かつてとは異なる臨床像で、ペラグラは現代でも存在することを、自験例を含め報告してきた。アメリカ合衆国におけるペラグラ研究は、歴史的には第2報で報告した Joseph Goldberger の業績が強調されるが、南部でのペラグラ蔓延を覚知し、その深刻な状況に警鐘を鳴らしたのは James Wood Babcock (1856–1922) である。彼の生涯と業績を紹介する。

【方法】 文献に依った

【結果】 James Wood Babcock は 1856 年 8 月 12 日、南カロライナ州 Chester に、父で医師の Sidney E. Babcock と母 Margaret Woods の間に長男として生まれた。彼が 5 歳の時、南北戦争が勃発し、父はアメリカ連合国（南部）から軍医として召集され、母はまもなく結核で死去する。戦後、寡夫となった父により 17 歳まで荒廃した南部で、十分とはいえない小中学校教育を受け成長する。しかし持ち前の聡明さで、北部の Phillips Exeter Academy と Harvard 大学に入学する。在学中はボート部に所属し、優勝も果たす。同校卒業後、1886 年に Harvard 大学医学部で修士号を取得。精神科医を志し、Massachusetts 州 Tewkesbury Almshouse で精神科レジデントを、1887～1891 年同州 Somerville の McLean 精神病院の助手医を務めた。その誠実な姿勢は同業者のみならず、患者からも尊敬され慕われた。1891 年、南部の医療に携わることを決意した彼は、South Carolina 州 Columbia の Lunatic Asylum（精神病院）の院長となり、診療・研究・マネジメントに携わる。南北戦争の敗戦で立ち遅れた南部では施設は老朽化し、人事組織面でも硬直化し、さらに当時の精神病院は社会的に厄介な立場にある人々を隔離する役割も担わされていた。彼はその体制の近代化と改善に専心した。McLean で知りあった優秀な看護師 Katherine Guion の助けで、1892 年に看護師養護学校を設立した。彼女とは翌年結婚する。彼は自ら病棟診療を欠かさず、人種にこだわらず患者やスタッフに接し、黒人文化・宗教にも関心を持っていた。しかし州議会は債務と税金面から予算増には消極的で、病院運営は厳しく、病院は他の殆どの州立病院よりも患者一人当たりの支出が少なく、一方死亡率は高かった。議会から病院の入院環境や患者対応を巡り、特に「人権擁護論者」から訴追されることもあったが、彼の紳士的で控えめな性格と誠実さは誰もが認めるところであった。

1907 年、Babcock は入院患者で精神症状に加え、皮膚症状と下痢症状を呈し、pellagra が疑われる症例を経験する。当時 pellagra が猛威を振るっていたイタリアを含めヨーロッパの専門病院・施設を歴訪した彼は、南部の患者が pellagra であることを確信する。そして 1908 年 Columbia で英語圏では初の pellagra 会議を開催、以後 1915 年まで計 4 回、外国からの発表者も含み全米会議を開催し、pellagra の症例報告、病態、病因などにつき活発な議論が展開された。その結果、pellagra が南部諸州で蔓延し、死亡者も多いことが明らかになった。1910～1912 年彼は pellagra に関し英語論文を発表し、初代会長も務め、全米ペラグラ研究協会を設立するのに尽力した。Pellagra の病因論については当時、感染説、栄養因子欠乏説などの諸説が提唱されていたが、彼自身は臨床経験から栄養因子欠乏説を信じていた。1914 年 South Carolina State Hospital を辞任後の翌年、州初の私立精神病院 Columbia's Waverley Sanitarium を開設した。彼はまた South Carolina 医科大学で精神医学に関する講義を行った。1922 年 3 月 3 日 Columbia で死去した。

【結語】 アメリカ南部の pellagra の覚知は、その後の研究と治療法の開発へと繋がった。これには Babcock の臨床的慧眼が大いに貢献している。